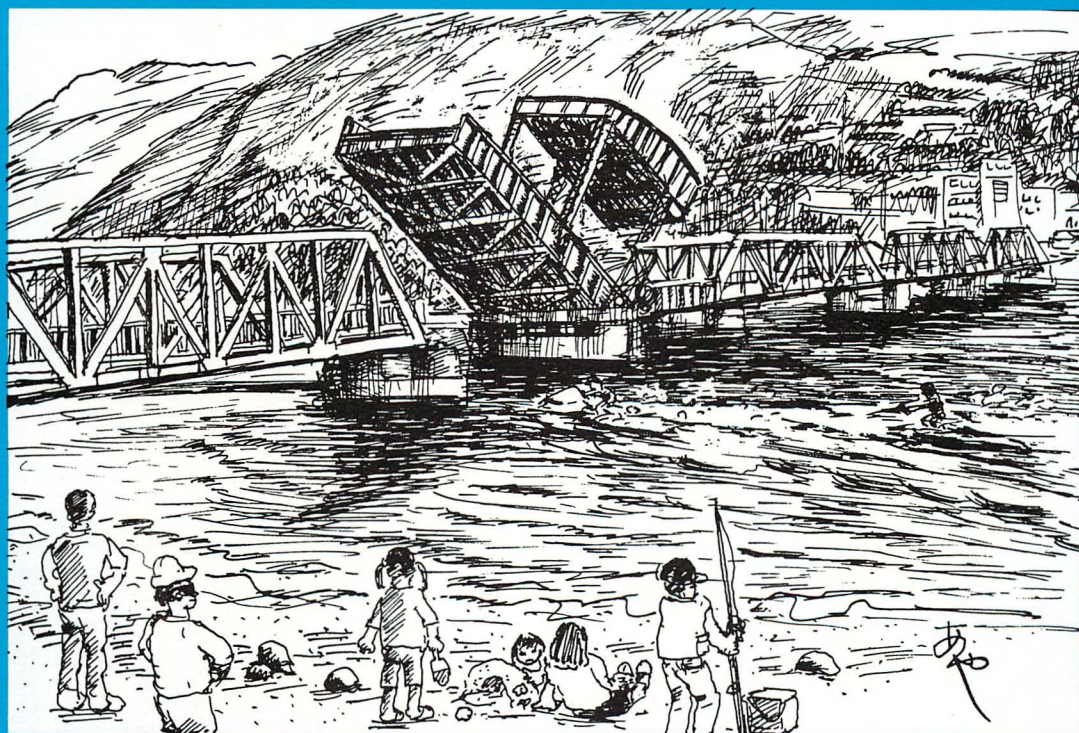


まちづくりネットワークえひめ

# 舞 とうん

VOL 45



長浜町 長浜大橋

**特** **長寿社会** —真の豊かさを求めて—

**集**

地域を拓く若者たち

- 若者塾をライフワークとして
- 夢を託して「いぶき」とともに
- 女性塾は永い人生の一コマ
- 青石に夢を託して
- 心が通い合うまちづくりを

アングル

継承する文化と創造する文化.....愛媛県知事/伊賀 貞雪..... 1

特 『長寿社会 一真の豊かさを求めて一』 集

地域を拓く若者たち

- 若者塾をライフワークとして.....北条市/金子 義文..... 2
- 夢を託して「いぶき」とともに.....久万町/梶川 憲一..... 4
- 女性塾は永い人生の「コマ」.....新居浜市/玉木 裕子..... 6
- 青石に夢を託して.....三崎町/増田 克仁..... 8
- 心が通い合うまちづくりを.....広見町/梅崎 正一..... 10

論談—まちづくり—

地域施設とひとづくり.....(株)地域計画研究所 代表取締役/若井 康彦..... 12

キラリ光るまち

村おこしは人づくり..... 鹿児島県牧園町 村おこし塾塾頭/田島 健夫..... 14

ふれあい広場

リレーでちょっとーク(川之江市・東予市から)..... 16

研究員活動を振り返って.....野村町役場/松川 伸二..... 18

国保一本松病院/尾崎 弘典..... 20

風おこしのちかい

魚のいるところに網を打て..... 守谷 和久..... 22

Information

媛のくにフラッシュ..... 24

(西条市・上浦町・中山町・津島町・日吉村・城辺町)

愛媛県から“組織改正”のお知らせ..... 27

特集 “長寿社会

—真の豊かさを求めて—

今号のテーマ

地域を拓く若者たち

人生八十年時代を迎え、人々は、本格的な長寿社会を経験することになる。そうした社会において、人々が真に豊かな暮らしを送るためには、地域のあり方そのものが、重要な意味を持つてくる。

すなわち、その地域にすむ人々が、地域を愛し、そこに生きることを誇りとし、自らの意志により、地域で様々な活動や交流等に積極的に参加できるような、潤いと活力のある地域を創造することが大切なこととなる。

そこで、豊かな長寿社会のあり方を探るため、前号に引き続き、特集のメインテーマを「長寿社会—真の豊かさを求めて—」とし、今号ではサブテーマを「地域を拓く若者たち」として、各地域で様々な活動を行っている若者たちに視点をあて、地域への想い、地域づくりの現状と課題、将来の展望等を通して、「求められる長寿社会」のあり方を考えてみることにします。(編集子 中村)

表紙の言葉

「肱川あらし」で有名な長浜町。河口近くに伸びた赤い橋は、大きな船が通る時、今でも閉閉します。

昨年は開閉橋の全国サミットが、長浜町で催され、橋は電球で飾られ、夜は一段と美しい姿を見せてくれました。町の誇れる大きな財産だと思います。

柳原 あや子



長浜町 長浜大橋

# 継承する文化と 創造する文化

愛媛県知事  
伊賀 貞雪



近年、心の豊かさや生活のゆとりを求める声が強くなる中で、人々の文化に対する関心はますます高まりつつあるが、私は、文化には「継承する文化」と「創造する文化」の二つの文化があると考えている。

「継承する文化」とは、私どもが先人から引き継いできた伝統文化や文化遺産であり、これは、私どもの手で保存し、後世に伝承していかなければならないものである。

また、「創造する文化」とは、

これまでの文化に、更に新たな価値を付け加え、あるいは全く新しく創造していく文化である。

そして、文化は、「継承する文化」と「創造する文化」の両面から振興発展を図っていかなければならないと考えているが、そのために大切なことは、まず第一に、ハードの面から、昨年オープンした東予の総合科学博物館や南予の歴史文化博物館といった文化施設の整備拡充を図っていくことである。

もう一つ大事なことは、ソフトの面から、文化祭といったイベント

を開催するとともに、それぞれの地域における、まちづくり、むらおこし活動を活発に行っていくことであると考えている。

特に本県においては、全国に誇りうる素晴らしい文化が培われているとともに、伝統ある歴史的な文化遺産が受け継がれてきているが、これらの文化的な資源を活かした地域づくり活動が県内各地で盛んに行われ、実り多い成果を収めていることは、誠に心強い限りである。

その地域づくり活動を行っていくうえでは、文化的資源を活用していくための発想力、企画力、創造力が求められるが、そのためにも、ふるさとづくりを中心となつて担うリーダーをはじめ、活動に参加する一人一人の役割は誠に大きい。

県としても、「ふるさと再発見・創造塾」を開設するなど、明日のふるさとづくりを担うリーダーの育成に取り組んでいるところであるが、今後とも、「愛媛県まちづくり総合センター」との連携の

とに、人と情報のネットワークの充実を図るなど、積極的に支援していきたいと考えている。

「ふるさとづくりの『リーダー』は『シーダー』であるべきだ」このようなことを言った人がいる。

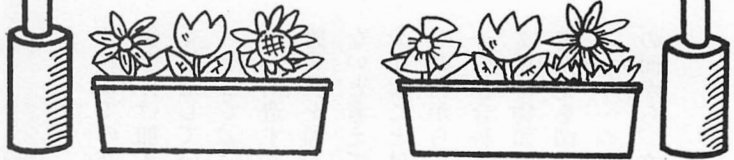
「シーダー (seed er)」とは、「種を播く人」という意味であるが、私は、リーダーが播いたふるさとづくりの種を、地域の人々が力を合わせて育て、その収穫を地域の人々が喜び、そして、全国の人々で分かち合う、これこそがふるさとづくりのあるべき姿ではないかと思う。

一人でも多くの皆様方の御参加により、県内の各地域において、個性豊かなふるさとづくり活動が、更に活発に展開され、「豊かさ」「ゆとり」「たくましさ」が実感できるような、潤いと活力のあるふるさとづくりが一層大きく広がっていくことを心から期待している。

特集  
**長寿社会 一真の豊かさを求めて—  
 地域を拓く若者たち**

若者塾を  
 ライフワークとして

北条市  
 金子義文



な活動を続けていま  
 す。

具体的には、演劇  
 活動による老人ホー  
 ム慰問、北条夏まつ  
 り（河野水軍仮装行  
 列）への参画、清掃

奉仕、先進地視察や  
 他塾との交流、地域  
 に関連した学習活動  
 若者塾通信の発行な  
 どですが、諸活動を  
 通して「まち（地域）  
 づくりは、まず、自  
 分づくり（意識改  
 革）」と塾生の意志

統一もでき、気運も高まってきま  
 した。

特に他塾との交流については、  
 かねてから打上花火的なものでは  
 なく、定期的な末長い交流ができ  
 ればと思っていました。そんな折

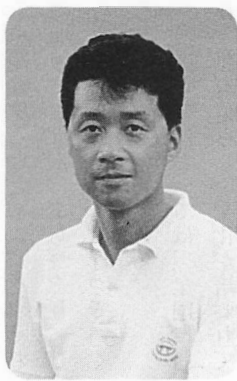
も折、玉川町若者塾「遊・湯・友」  
 との交流会の話が持ち上がりま  
 した。北条市と玉川町は共に高縄  
 半島に位置し、豊かな自然と文化  
 に恵まれています。しかし、今ま

で隣接していながらも、中子圏と  
 東子圏に分かれ、交流も疎遠にな  
 りがちでした。ところが今回の衆  
 議院小選挙区制導入により、愛媛  
 新二区として選挙区を共にするこ  
 とになったのです。

よく見てみると両塾は、設立時  
 期、構成人員、平均年齢など規模  
 的にも非常に似かよっており、さ  
 らに活動は、それぞれ地域固有の  
 資源を活用したオンリーワンのま  
 ちづくりを地道に展開してしまし  
 た。二十一世紀を目前にひかえ、

世界の政治経済の諸情勢がボーダ  
 レス化しつつある現在において、  
 郷土の限らない発展と地域の活性  
 化を願う若人が、共に手を取り合  
 い、学び合い、支え合って、崇高

なる理想郷の実現をめざした人的  
 ネットワークを形成することは、  
 まことに時機を得た画期的なこと



であると考えたのです。

交流会はユニークなものになり  
 ました。主なものを紹介すると、

①記念植樹（北条市木のクスノキ  
 を玉川町総合公園へ植樹）

②交流会議（お互い実績を交換  
 しあい、今後の課題の検討）

③党書調印と祝賀会（今後も定期  
 交流を持つ趣旨の党書の交換と  
 キジ鍋を囲んでまちづくりにつ  
 いての語り合い）

④親善むかで競走（両市町境界の  
 笹ヶ峠をゴールに三人一組の駅  
 伝方式で三百メートルを力走）  
 などなど。他にも、玉川近代美術

館や鈍川温泉、総合公園などの施  
 設案内をしていたとき、玉川塾の  
 皆さんには大変お世話になりました。  
 私自身二日間にわたり学び合  
 い、語り合ったのですが、「みんな  
 同じ悩みを持ちながら頑張って  
 いるんだな」と安心したのが実感  
 です。参加した塾生たちからは「自  
 分の殻に閉じこもってはダメ」、  
 「今までに見たことのない自分が  
 見え、人間に幅ができた」、「新し  
 い何かを創り出したい」と感想が

- 「かざはや」は平均年齢二十八  
 歳という名実ともに若人のまちお  
 こし実践集団です。「まちづくり  
 は人づくり。人が変わらなければ、  
 まちは変わらない」との基本的見  
 解に立ち、
- ① どんどん自己主張しよう。
  - ② 感動する心を育てよう。
  - ③ 心を許せる仲間をつくらう。
  - ④ 北条に関心を持つよう。
- の四点を当面する目標として地道



記念植樹

次々飛び出し、みんなそれぞれ何か感じ取ってくれたようです。

今年、玉川塾を北条へお迎えする番で、七月二十九日と三十日に開催される夏のイベント「風早海まつり」に招待し、河野水軍にまつわる水軍レースなどを通して交流会を計画中です。また、昨年度北条市より寄贈植樹したクスノキのお礼に、玉川町からサクラが植樹される予定です。それぞれの大地に、しっかりと根をおろし、枝葉をのびし、幹を太らせる如く、両塾の絆も強固になっていくこと

を切に願っています。

今、地域活性化の手段として「交流」が重要なキーワードの一つとなっています。ある安定した状態が長く続き過ぎると、それは活力を失ってしまいます。そこへ異質なものを加えると、一時的に混乱を起しますが、その後、より活性化した別の状態が生まれることがあります。この法則は「まち」にも当てはまるのかもしれませんが、定住人口は増えなくても、交流人口を増やすことによって、その地域に活力が出てくるのは先進地といわれる地域です。に実証済みです。

生活圏などの関係で、近くて遠いまち、つまり異質な地域（歴史や文化的背景、産業などが違う）と思われる玉川町と北条市の両若者塾が交流し合うことによって、両塾に新たな活力が生まれる可能性は飛躍的に増大したのではないのでしょうか。さらに交流によって、地元のそれまでの常識では異質（型破り）化した若者塾が両市町に活性化をもたらすことに

なれば、これ以上のことはありません。

二十一世紀には高齢化が一段と進みます。平均寿命も延び人生八十年時代という長寿社会を迎え、市町村をはじめ各地域では「子どもから高齢者までみんなが住みよいまち」をめざした「まちづくり」とか「むらおこし」が全国的に展開されているのはご承知のとおりです。

北条市においては老人保健福祉計画を策定し、デイサービス事業やショートステイ事業など各種福

祉サービスの整備・充実を含め、すこやかな心ふれあいまちづくり

に全力で取り組んでいます。かざはや塾でも、一昨年より、お年寄りとの交流の一環として市内の老人ホームを慰問し、自作自演による「河野通有奮戦記」の演劇活動を続けています。

人と人とのつながり（絆）や真の心のふれあいは一夜にできるものではありません。若いうちから仕事オンリーの人生ではなく、自分の趣味に生き、職場以外の交友関係を深め、地域に根ざした生活を創造することが大切だと思います。そういう意味において、あわせを感じる地域づくりをめざす若者塾の活動は、長寿社会を生きがいのあるものとするために、私たちに何らかの示唆を与えてくれるものと思います。

地域づくり活動を私のライフワークとして、無理なく自然体で今後ともかわっていききたいと思っています。昨今です。

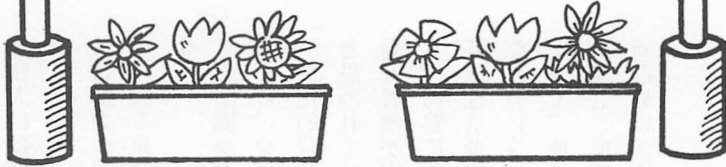


親善むかで競走

特 集  
**長寿社会 一真の豊かさを求めて—  
 地域を拓く若者たち**

夢を託して  
 「いぶき」とともに

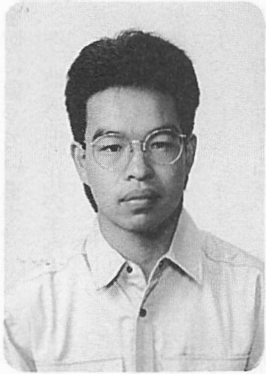
久万町  
 梶川憲一



イベントを催したり、野外レクリエーションの場である「ふるさと旅行村」、ラグビーの合宿が出来るスポーツ施設等の整備を行っており、内外を問わず人々の交流を促し地域の活性化が推進されています。

私は、生まれこそ久万町ですが、小学校低学年の時、両親の仕事の関係で、松山に転校し、その後就職するまでは松山で生活をしていました。しかし、転校後も、この地域との関係が全くなかったわけではなく、こちらに、家・田畑・

私の住む久万町は、愛媛県中部の四国山地に抱かれた標高四百〜八百メートルの高原に位置しており、世帯数三、〇四六戸、人口七、八九六人（平成七年三月現在）の農山村地域です。町の特色としては、古くからの特産品である木材の生産をはじめ、清涼な気候を生かした高原野菜の栽培が盛んで、また、夏には「御用木祭り」、秋には「林業祭り」等と、特色ある



山林等があり、週末には家族で帰ってきていました。そして、父親と共に、それらの管理を行ってきました。小中学生の頃は、もちろん満身に仕事もできないわけですが、父母のしている仕事を見たり、出来る手伝いをしていました。本格的に手伝うようになったのは高校の頃からでした。その影響があったかなかったかは定かではありませんが、高校は農業高校で、

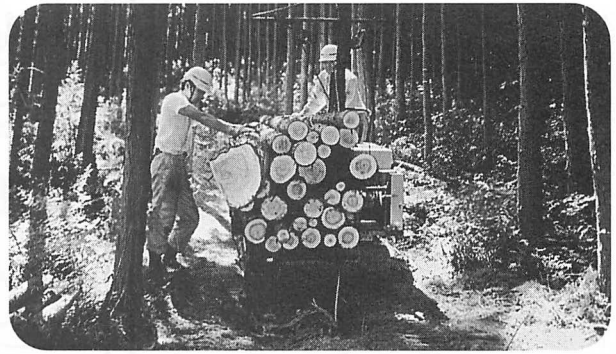
大学にいたっては愛媛大学農学部  
 の森林資源学（旧林学）、林業生産工学研究室に在籍していました。その後、愛媛大学大学院に進み、卒業を間近に控え、いざ就職という時、いろいろな選択肢の中から、「仕事はふるさとで」と思いついたのでした。

私の実家は農家林家であり、できることなら、いままで学んだ知識を活かし、先祖代々受け継がれた山林の管理を父と共に引き継ぎたいという希望がありました。しかし、私のところの山林は小面積分散所有形態で、そのほとんどが戦後に植林された林



伐倒木の造材作業風景

齢の若い林分ですので、経営基盤より、資産的意味合いが強く、林業経営だけではやっていけないのが実状で、これから経営基盤を再構築するには何十年、いや何百年という歳月が必要です。そのうえ、私は、まだ森林の管理に必要な幅広い知識と、熟練した技術を持ち合わせていませんでした。これまでの手伝いや、学生時代の学習で、最小限度の知識を得ていましたが、技術については、素人同然でした。



小型林内作業車を使用しての搬出風景

幸い久万町には「怖いぶき」という林業の担い手を育成し、森林の保育管理、素材生産等の事業を行う第三セクターの林業会社がありました。この会社は、月給制で、サラリーマン並の福利厚生と通年雇用体制を確立しており、若者が誇りを持ち安心して働ける職場環境が確保されています。私は、この会社に就職し、技術を磨き、地域に貢献すると共に、休日を利用して、実家の経営基盤を父と共に再

構築しようと考えたのです。

入社してみると、設立当初は四人で始まった社員が、平成六年四月現在、私ともう一人の同期入社の人を含め十六人で平均年齢は二十九歳と若く、ほとんどが町内出身者及び、Uターンの青年です。仕事内容は、下刈・除伐等、森林の保育管理と素材生産で、これらの作業には非常に熟練した技術が必要とし、新人はこの技術を習得するためには長期間を必要とします。そのため、設立以来、新入社員は先輩方の指導による社内研修をはじめ、県等が実施する研修会に積極的に参加し、技術の習得に努めてきました。二年目に入った今日でも、先輩方に追いつき早く一人前になると、常に向上心を持ち仕事に励んでいるところです。この会社は、ふるさと創生事業費一億円を投入し平成二年に設立されましたが、その設立の背景には、林業の労働力不足が深く関係しています。過去においては、比較的林家の「自営力」が強く、農閑期を利用して森林を管理するほ



昼食風景

どの林業労働力が存在し、森林組合は、いろいろな形で林家の仕事をサポートしてきましたが、その後、木材価格の低迷等により、林業従事者の減少と高齢化が進んだため、現在では林家の労働力は衰退しており、林家をサポートする森林組合の素材生産部門も同様で、林業労働力の提供に陰りが見え始めました。また、久万町の森林面積は総面積の八六%に当たる一四、二二九ヘクタールを占めており、

そのうち八九%が人工林で、なかでも除伐等保育の必要な林分は四割を占め、間伐等の必要な林分を含めるとその割合は全体の七割にもなります。

このように労働力の確保が困難な状況では、地域に広がる森林が管理不足となり、その質（木材、公益的機能等）の低下が懸念されてきました。そこで、先人が築いた森林資産の有効利用を図り、地域を活性化させるために、林業として山村の担い手を育成することが必要であり、この会社設立となったわけですが、それだけにこの会社の果たすべき役割は大きいものがあります。

そして、日々の仕事はきつく、厳しいものの、私は入社二年目になり、同世代の先輩や同僚に囲まれ楽しくやっています。久万町の林業、山村の担い手として、今後とも公私共々この町で活動して行くつもりです。

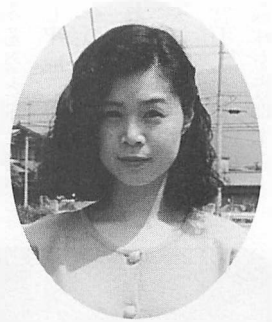
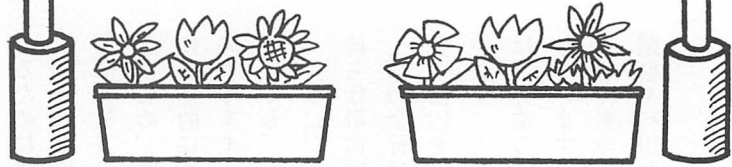
特集

# 長寿社会 一真の豊かさを求めて— 地域を拓く若者たち

## 女性塾は 永い人生の一コマ

新居浜市

玉木裕子



選ばれる理由に疑問  
があったからです。

その気持ちは上司  
にきちんと伝えたの  
ですが、結局、説き  
伏せられました。何  
事もスタートが肝心  
なのに、すっきりし  
た気分にはなれない  
のでした。

「女性塾って何するところ？」  
「男女共同参画型社会？何それ」  
訳もわからず市役所の椅子に腰  
かけている私は、自分が自分でな  
いような複雑な心境だったのを覚  
えています。テーブルの上に置か  
れている美しい文字で書かれた  
『玉木裕子』のネームプレートを見  
眺めながら「ああ、塾生の一員に

「市役所から若手女性リーダー  
の養成というところで、うちから一  
人出してくれということなんだが、  
玉ちゃん、出てくれんדרောうか」  
昨年四月、職場の上司からこの  
ような女性塾への参加の話があつ  
たのですが、その時、私は素直に  
ハイと引き受けることができませ  
んでした。ただでさえ「私にさせ  
てください」というようなものに  
は思えなかったのに加えて、私が

なったんだなあ」と思っ  
たり、一人また一人と集  
まってくるバリバリの  
キャリアウーマン風の人  
を見ながら「私だけ場違  
いなんじゃない？」と  
思ったり。「エライ目に  
遭ったナ」というのが本心でした。  
さて、ここで「女性塾 With  
h」について簡単に紹介させてい  
ただきます。

「With」は、仲間が共に(W



任命・委嘱式にて



市長へ報告書提出

ith) 集まって、男女が生き生  
きと暮らせる「男女共同参画型社  
会」の実現に向け、その第一歩と  
して平成四年九月に発足。連合婦  
人会などの女性団体や、民間企業  
に勤めるOL、市職員の若手女性  
など二十〜四十歳代のそれぞれの  
立場で活躍している、十五人のメ  
ンバーで構成されています。  
毎年三月、伊藤武志市長に提出  
する活動報告書には、家庭や職場  
における役割分担意識の現状や問





高知県での研修風景

題解決に向けて、主婦、働く女性の立場からの意見や提言が盛り込まれ、地域の活性化に役立つ取り組みとして評価を得ています。

私は二期生として、平成六年四月から（任期は九年三月まで）仲間入りをし、以来、種々活動に参

加してきました。

月一〜二回の定例会の日の朝、「塾へ行ってきます」と職場の同僚に一声かけ、専用ファイルを小脇に抱え、いざ！市役所へ。この「いざ」は、塾入りの一件もあつてか、一年経った今も（塾生を）させられているという思いが残っていて、塾通いはおっくうな方とというのがまだ正直なところです。それでか否か「塾」の日は「いざ」という気合いのようなモノを入れるを得ない、何とも情けない有り様なのです。

こうした状況で、この一年間男性の家庭参加実践セミナーとして「料理・掃除教室」を開催したのをはじめ、「ふるさと再発見・創造フォーラム」への参加、高知県へ出向いての研修の実施、また、子どもと一緒に学習するシリーズ「親子で学ぼう」では、双海町の若松進一さんをお招きして講演会を開催するなど、主婦、子ども、男性と一緒に地域と深くかかわった行事にも取り組んできました。その間、周りの人たちからは「え

えことだと思ふよ。がんばりや」と言葉をかけてもらったり、塾の活動に参加、協力してもらったりしました。それらは女性塾というものに妙に堅苦しく構えていた私にとつて、温かく、ありがたい一言であり、励みになっているこ



男性の家庭参加

実践セミナー

とは言うまでもありません。また、十五人のメンバーと知り合えたこと、そして多種多様な考え方があることを知ったことは大いに勉強になったと思っています。

私と地域の接点のひとつとして、女性塾をとりあげたわけですが、人とのかわりが地域とのかわりとなつて、それが地域の活性化へとつながっていく。そういった意味において、まちづくりのために、微力ながらこんな自分でも役立っているのかなと思う今日このごろ。

「よし、女性塾へ行ってくるぞ」

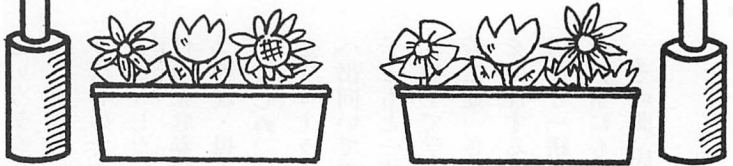
そう笑顔で出向いて行ける日が近いのか遠いのかはわかりませんが、そのときに初めて「私は地域づくりのためにがんばっています」と胸を張って言えるような気がします。

そんな日がそう遠くないかな予感がしながら、永い人生の一曲マとしての私の女性塾は二年目に入ります。

特 集  
**長寿社会** — 真の豊かさを求めて —  
**地域を拓く若者たち**

青石に  
 夢を託して

三崎町  
 増田克仁



館のホールを借り

「クリスマス・デイ  
 スーパーテイー」を  
 行ったりと、イベン  
 トの数こそ知れたも  
 のでしたが、メンバ  
 ーは本当に熱くなり、  
 頭をひねって企画や  
 準備をし、その中で  
 自分達の有り余った  
 力をクラブの活動に  
 注ぎ込んでいました。  
 しかし、クラブで唯

人の役場の人から若者塾に入らな  
 いかと声をかけられ、仕方なく「さ  
 きがけ橋塾」に入ることとなりま  
 した。

入った当初は、まず自分達が進  
 む目標を決める必要があり、話し  
 合いの結果、まずは自分達の住む  
 町自体を良く知り、何があり、そ  
 れをどう伸ばしていったら良いか  
 を考えてみようということになり、  
 町をウォッチングして回りました。  
 そして試行錯誤の末、一つのもの  
 にたどり着きました。それは、こ

ました。例えば強固なこの石を家

の基礎に使ったり、平地が少ない  
 ために青石を積み上げ段々畑を  
 作ったり、また強風をさえぎるた  
 めに家の周りの石垣として用いた  
 りと、昔の人達は、この青石をう  
 まく利用して来ました。しかし、  
 この建設材料とも言える青石は、  
 現在ではコンクリートへと変わり、  
 青石を積み上げた風景は、だんだ  
 ん失われつつあります。私自身も、  
 この「さきがけ橋塾」に入る以前  
 は、子どもの頃から見慣れて来た  
 青石の風景なんて、どこにでもあ  
 る大したものではないと、気にも  
 留めていませんでしたが、今こう  
 してこの三崎の風景を見つめ直す  
 と、海岸や山のブルーやグリーン  
 の中に灰色の無表情なコンクリー  
 トのかたまりが多くなって来たこ  
 とがすごく目に付く様になりました。  
 そうした中で、私達「さきが  
 け橋塾」は、もう一度この青石に  
 目を向け、これを保存し、多方面  
 に利用しながら、町づくりに役立  
 てていこうと考えています。

高齢化、過疎化が進む三崎町に

私は、三崎町の二名津地区で建  
 材店を営みながら「さきがけ橋塾」  
 という若者塾で活動しています。  
 ところで、私は「さきがけ橋塾」  
 に入る前には、田舎に残っている  
 同級生とその仲間達十人位で、「ア  
 ミューズメントクラブ」と呼ぶ、  
 いわゆる「まちおこしグループ」  
 を作って活動していました。当時  
 はやりの「ねるとん」を観光名所  
 の「伽藍山」で行ったり、町民会

一結婚していた  
 私は、子どもが  
 生まれると家庭  
 と仕事の両方で  
 忙しくなり、「ア  
 ミューズメント  
 クラブ」での活  
 動も滞りがちにな  
 ってしまいました。  
 そうこう  
 していると、知



の三崎に豊富にあ  
 りながら、地元の  
 人には別にこれと  
 言って語られるこ  
 ともない「青石」  
 でした。皆さんは、  
 この「青石」を御  
 存じでしょうか？  
 正式には、塩基性  
 片岩（緑色片岩）  
 と言います。この  
 青石は、古くから  
 三崎の人の生活と  
 密接な関係があり



とって何が大切なかを考えた場合、福祉・産業振興・若者の定住促進等、様々な課題があると思います。しかし、これらの他にも、町づくりのために大切なことはあると思うのです。人と自然にやさしく、豊かな安らぎのある町となっていく三崎を私は夢見るのです。

例えば、青石を豊富に使った公園を整備したり、観光の案内表示として青石に文字とかを刻んで置いたり、所々道路の横にポツンとアートとして置いたり、商店街や舗道に青石を敷きつめたり……。こんなふうには、とことん青石にこ

だわりを持って「青石の三崎」と呼ばれる様な町にしてみたいと思います。私の個人的な夢としては、趣味でもある音楽の方面から「青石の音楽堂」を作ってみたくも思うのです。おかしいかもしれないけれど、青石を整然と積み上げた石垣は、それが海・山・まちに溶け込んで、それをじっと見つめているだけで、そこから音楽が聞こえてくるような気がするのです。

一番思うのが、自分達が老人になり、子ども達が大人になった時、青石や海・山に囲まれた人の心によさしい三崎町であって欲しいということなのです。

ところで、この原稿を書いているうちに、「まちづくり、村おこしとは、一体何なんだろう。そして何のため、だれのためにするのだろうか？」そんなことが頭をよぎりました。いざ、まちづくりや村おこしだと言っても体裁だけをとりつくるって、前に向かって進まないし、絶対成功はしないと思う。この「さきがけ橋塾」にしても、何年も前から続いている

のですが、思ったほど、前には進んでいないのが現実です。でも、自分達をほめるのではないが、現在のメンバーはもう四年ほど続いています。塾の活動を続けていくうえで、重要なことは、あくまでも行政の援助は最後の手段とし、熱い気持ちで自分の友達に語りかけ、またその友は別の友を呼び、

まずは地元の多くの人達の心を動かす様にすることだと思っています。ただ、最初の内は楽しくやっていたり何か活動をしている様に見えるけれども、長く活動していると、様々な壁が立ちはだかつて来ます。例えば、行政との付き合いとか田舎のいろんな人からの視線とか、その壁にもいろいろあるが、

まちづくりに関して、真剣に考えれば考えるほど、この様な壁にぶち当たります。



井野浦地区池尻の防風防潮石垣

しかし、何とかこの壁を破り、本当に自分が頭に描く夢を成功させたいと思います。そして、ただ観光客を呼んで、まちづくりをしているのかの様にみせるのではなく、本当に地元の人が、そして、自分やその家族達が、心豊かに暮らせるまちづくりをしていきたいと思えます。青石に夢を託して……。

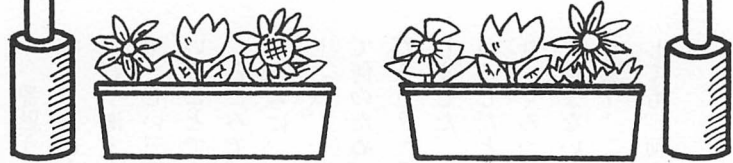
特集  
**長寿社会 一頁の豊かさを求めて—  
 地域を拓く若者たち**

心が通い合う

まちづくりを

広見町

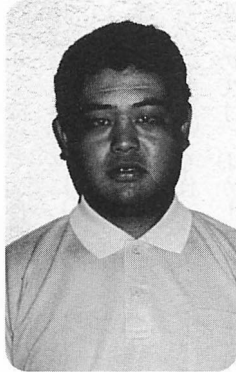
梅崎正一



私の生まれ育った広見町は、日本を代表する清流四万十川の源流の一つ広見川等、幾つかの清流が合流する「川の町」であります。また、町の南部には標高千二百メートルを越す高月山山系を控えており、成川溪谷などの観光資源を有する「山あいの町」です。

**ネットワークづくり（若者塾）**

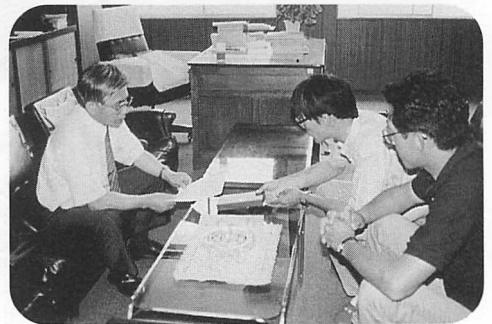
人口は昭和六十年頃までは約一万三千人で推移し、以後は徐々に



で町内泉地区で古くから地域産業の一つとして受け継がれてきた手漉き和紙「泉貨紙」作りを地域の文化遺産として保存して行こうと結成された「泉貨紙保存会」の活

減少して現在約一万二千人となっていています。そうした出口の見えない過疎、高齢化の進む我が町で、昭和六十二年に町の呼びかけで「広見町の将来を担う人材を育成する」という目的で、町内の若者の有志が集まり「広見若者塾」が設立されました。当初は町内資源の掘り起こしのため、研修をしておりました。そんな中

動にスポットを当て、若者塾としてもこの貴重な文化を後世に残していきたいとの思いで「泉貨紙」に関するゼオ作りを手掛けることとなりました。保存会の十数名の会員は皆さん六十代以上の方達ばかりで、自宅の農作業と両立させながら会の活動を行っています。保存会の活動は、原木を高知県等より購入し、和紙として出来上がるまでの工程をすべて、手作業で行っており、見た目以上に骨の折れる作業です。この紙漉きは、かつて地区の小学校だった建物の一室で行われています。また、一般の方や小学生にも紙漉きの体験が出来る様に開放されており、毎年見学に訪れる方が増え続けているそうです。私も昨年地区の青年団員らと共に体験学習をさせていただき、会員の皆さんに親切な手ほどきを受けました。まず、地区における「泉貨紙」に関する歴史的背景と、紙作りがどれ程地区にとって重要な産業として成り立っていたかを詳しく説明していただき、作業手順を教えていただいた



「今よみがえる泉貨紙」のビデオを小学校に配布

後、紙漉きを実際に体験させていただきました。この体験を通して私を感じたことは、道路が良くなったり、ハード面の充実が先行している感のある我が町で、こうした体験をすることによって、地域の歴史を学んで行くことこそが、町づくりの第一歩ではないかと思えます。そして高齢化の進む我が町ですが、保存会の皆さんの熱意を目の当たりにし、町づくりの基本となることを教わった気がしません。（高齢化を止めることは出来ません。しかし、高齢者とのネットワークを通じ、町おこし、産業お



きほくの里コンサート

こしに役立てて行くことは可能ではないだろうか。  
 なお、若者塾の制作した泉貨紙作りのビデオは、町内の小学校等で教材として利用されることとなり、私達塾生としても今後の町おこし事業への励みとなりそうで大変に喜んでいきます。

### 町づくりは人づくり(青年団)

私は昭和六十二年に若者塾に入塾したと同時に青年団にも入団し、これまでに数々の行事に取り組んで来ました。広見町には現在、三つの地区青年団が有り、それぞれの団で団員相互の親睦と資質の向上を目指し、地域社会との交流を深めております。活動は各種交流会、スポーツ大会等、若者ならではの行事を中心としておりますが、夏祭り等の町の行事や奉仕作業、若者塾と連携した町おこし行事にも積極的に参加しています。四年前私が団長をした時、当時の役員の間から「レクリエーション的な行事ばかりじゃなく地域奉仕的な行事を設けては」の声が上がり、色々考えた結果、町営の老人ホームへの慰問を行うこととなりました。さっそく老人ホームと交渉し、三時間以内との条件が付きましたが、心良く受け入れて下さることとなり、ゲームでお年寄りとの交流を深めました。最初は戸惑い気味だった私達も、お年寄り達の心遣いのお陰で皆が気軽に話せる様



おとつがいなゆかたコンテスト

になり、ゲームの進行もスムーズに行うことが出来ました。約束の時間が過ぎ私達が帰る際には、誰かれともなく「また、来てやんなはいや」「おばあちゃん元気でね」などと言葉が飛びかい、わずか三時間の行事ではありましたが「ああ、来て良かった」と感激したのをはっきりと覚えています。ただ、

私と仲良くなったあるおばあさんが、涙を流して「ありがとう」と言ってくれた姿には、そのまま我が国の高齢化社会の現実の厳しさを垣間見た思いがしました。南予地方は全国でも高齢化の進んだ地域であり、今後私達若い世代がどの様にこの問題とかわわって行かなければならないのか、行く先は不透明ですが、若者同士が切磋琢磨し、自己の向上を目指し地域社会の原動力となることが先決であることに違いはありません。そして、若者と高齢者のお互いのネットワーク(心の通い合い)を大切にして地域社会に貢献して行きたいと思っております。

最後に、「戦後五十年決議」がやっとのことで衆議院で採択されましたが、戦後五十年、絶望の淵から這い上がり、働きずくめで今日の日本の繁栄を築き上げて下さったお年寄りの皆様と、平和国家日本を二十一世紀へ向けて担って行く私達若人が、共に心を通じ合わせて生きて行ける社会となることを願っています。

# 地域施設とまちづくり

(株)地域計画研究所

代表取締役

若 井 康 彦

はじめに

近年、地方を歩いていてびっくりするのは、各地に不思議な地域施設が出現していることである。

北陸のある町で、木造の、大変よくデザインされた自然体験施設にでくわした。驚いたのは宿泊料金一泊六〇〇円、きれいな寝具つきで、おまけに外来のわれわれにも利用させていただけるとはうれしい限りだが、よく考えてみると、このコストでは、シーツの洗濯代しかでない。確かに人気の施設ではあるが、都市からひとを集めたその先、それをどのように生かしていくのか等、もうひとひねり詰

めて考えてみる必要があるだろう。

## 一、『いい線こいて』

### 地域施設の限界がみえてきた

今日、全国各地に、一応の水準の多様な施設が整いつつある。昭和五十年代頃からの、いわゆるハコモノ行政の反省から、地域の生活環境施設に対する認識は大いに高まっている。

最近の地域施設の通常のでき方は大体こんな按配である。

あるカテゴリーにおける『施設需要』が生じる。調査が始まる。地域における施設需要の実態が分析される。先進事例に関する情報

が全国各地から集められる。それらを勘案し、地域の特性も加味して計画が立てられ、財政事情も考慮しながら、施設が造られる、という風に。こうしたプロセスは基本的に適正である。だが、結果からすると、こうしたプロセスにもいくつか問題は残る。

第一に、そのカテゴリーの問題がある。地域施設といっても様々な種類がある。しかし、もともと種類に分けて考えること自体に無理がある。それは行政需要の内容というよりも、行政の分類から決められてはいないか。民間企業なら、領域みたいなことにこだわっているわけにはいかない。それまでの領域を踏み越えて、新たな分

野を切り開いて行かなければ需要の変化については行けない。需要の内容が曖昧なことは、そこに新たな需要が発生している兆しである。

第二は、先進事例をどう活用するかの問題である。学ぶことの手なわが国では、『先進事例』の伝播する速度は早い。先進事例から得たヒントをじっくり醸成して、より自分らしく生かすのは大事なことである。しかし、先進事例をモデルにして、より自分らしいファッションを生み出している地域はなかなか多くはない。それは、自分の地域にとって、どの点が『先進』なのかがはっきりしないまま進むからではなからうか。年度毎に成果を求められるシステムの中で、とりあえず『先進事例』に学ぶ(あるいは真似る)ことが手っ取り早い方法だとは言ってほしくない。

第三は設計標準の扱いで、第二の問題と一脈通じる問題でもある。



何もないところからものを創ることとは大変な仕事である。先例に学ぶことは大事なことである。どの地域であろうと、変わらぬ人間の活動の法則があるはずだ。そういう観点から造られているのが、設計基準であった。また、そうした基準でもなければ全国を対象とする一律の補助基準など、考えようがないというのも自然の成り行きである。しかし、一律の補助というものは、乏しい財源を出来るだけ平等に実施しようという、いわばナショナルミニマム達成の段階では合理的だが、今や一律の施設は充足されつつあって、むしろ、一般的な施設にも個性が求められる時代である。

基準とは大抵、どこかでそこで暮らす人々のぎりぎりの活動の成果としてできたもののエキスを足して数で割ったものである。万病に効くようで、どの具体的な病にも効かない薬の類である。

最後に事業手法の話があつて、事業の枠が、施設の内容を逆に規定してしまうことの問題である。

## 二・これからの地域施設とは

そろそろ地域施設の水準も次のステップへ飛躍すべき段階である。そのために考えなければならぬのは、次のような点ではないだろうか。

・ヒトを中心に計画する  
標準的施設にふさわしい標準的管理者のいないのが、地域の一般である。

先の施設では、ひと通り説明を聞いたところで、役場の担当者が言った。

『この施設が生きるか生きない



※交流施設の機能も備える  
愛知県、足助町福祉センター「百年草」

か、それは管理するひと次第です  
ね』

あ、やっぱりな、と思うのは、それがまずよくやっていると思う。大方の地域の状況だからである。

しかし逆に考えたらどうだろう。ひとを得たらそのひとなりに合わせて施設を考えるのである。どっち道、地域には地域に今生きている『個性的』な人間しかいない。その間尺にあつた地域づくりをすべきだし、もっと具体的には、彼等の活躍しやすい施設を計画すべきではないだろうか。

・領域を曖昧にする  
基準からすると、全然不足する種類の施設がある。人間が少なければ、多目的に対応した機動的な使い方のできる施設にするのが自然だと思う。そのためには、狭い意味の効率性や経済性を越えた地域のメリットを明確にすべきだ。

・マスタープランによる段階的整備  
年度を越え、個別の事業を越えるためには、段階的整備が必要である。しっかりしたマスタープラン

ンを確立して、少し時間をかけながら複数の事業を組み合わせる等の工夫を凝らす。機を逸する恐れはあるが、次にど真ん中のストライクがくる可能性も少なくない。マスタープランはよい選球眼みたいなものである。また、場合によっては、地域に現存する施設が、需要の内容を再検討して、途中で改造する等、柔軟な運用をすることが必要と思われる。

## 終わりに

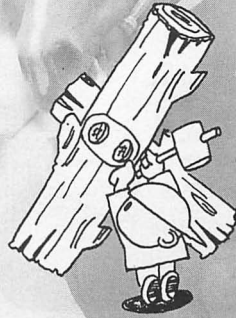
地域はとうとう、これまでの秩序やシステムを変えずには新しいものは生まれまいという限界まで来たのである。施設計画に限らない。交流もイベントもそれを行うことと同じ程度に、それによって新たなシステムへの組替えを実現することが大事である。そのためには、これまでのシステムを壊してみる——役場以外の『地域』そのものではなく、勇気が必要になったのではないだろうか。

きらり

光るまち

# 村おこしは

ひと

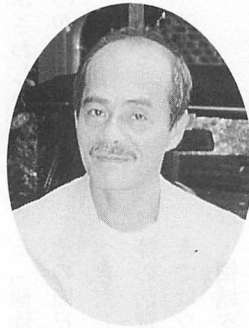


# づくり



鹿児島県牧園町

村おこし塾 塾頭  
田島 健夫



通の人々。特別のカリキュラムも金も、あつたわけではありません。「なぜ」「どうして」といった少年の様な素直な心と、柔軟な頭脳で、楽しみながら（本

日は、苦しみながら）、ゲーム感覚で取り組めたことが、良かった様な気がします。現在、「日本全国塾ばかり」というような、塾ブームがおこっています。ところで、「塾って一体何なのでしょうか？」進学塾、幼稚園から大学まで、様々な塾があります。しかし、本来の塾とは、

直な心と、柔軟な頭脳で、楽しみながら（本

今日、私達牧園町おこし塾の役割は、もう最終局面に、向かって、動き始めたと思っています。様々な事業や数々のプロジェクトを、有機的に動かすためには、私

ゲーム感覚で取り組めたことが、良かった様な気がします。

どもの力が、限界にきているから

現在、「日本全国塾ばかり」と

いうような、塾ブームがおこって

います。ところで、「塾って一体

何なのでしょうか？」進学塾、幼

稚園から大学まで、様々な塾があ

ります。しかし、本来の塾とは、

我が、牧園町村おこし塾は、昭和六十三年に役場主導で開設され、初年度だけ講師謝礼等の運営資金として、百三十万円をいただいたが、次年度からは、毎月千円ずつを塾生から徴収し、全ての活動資金は、この中で賄われることになりました。総勢二十人の塾生は、今日までほとんど顔ぶれも変わらず、各自の掲げた「目標」に向かって、着実に進んでおり、既に目標を達成した者、また予想だにしなかった新出のプロジェクトができてきたり、おもしろい人材が流

入したりと、一万一千人の私達牧園町民は、確実に、動きはじめました。発展ではない、進歩でもない、言うなれば、次の来たるべき時代を生き抜くための、地方の町の変革が始まったのです。二十人の塾生は、決してスーパードライトではなく、ただの、本当に、普





です。

ここで、私達塾の考え方、運営そして、具体的なプロジェクトへのアプローチの方法について、お話ししたいと思います。牧園町は雄大な霧島国立公園を有し、茸・お茶・畜産等の第一次産業と、ホテル・旅館業等の第三次産業を基幹産業とし、鹿児島国際空港、九州自動車道から約二十分、年間百万人以上の観光客が流入し、就業の機会も与えられ、そこで生きる人々にとってなんの不足もない町の様であります。

しかし、その実態は、県民所得は、九十六市町村中七十六位、おまけに長年の政争に明け暮れた日々に、身も心も「ボロボロ」という状況でありました。それは、新しい観光産業の「芽ばえ」により、産業構造の変化が、社会構造・家族構造までも変えたからであります。

そこで、「塾」で考えたことは、本来の意味での「村おこし」とは、ただ単に、町の発展ではなく、「いかに「町」と「町民」が健康で、



生き生きと、輝やいているか」ではないかということです。まず、健康な「町」と「人」を、取り戻すこと、そのために、病気を特定する必要があります。特定したら、いかに治療すれば治癒するか、という処方箋を作る。そして、どの様に戦って行くかという戦略論をくり返し行い、塾の活動方針を作り上げていきました。塾生は、「九つのテーマ」に分かれ、それぞれのグループが、目的をはっきりさせ、それを現実はどう反映させて行くかという取り組みを行ってまいりました。「決して、アクションは起こさない。理論が出来るまでは、行動してはいけません」という言葉のもとに。

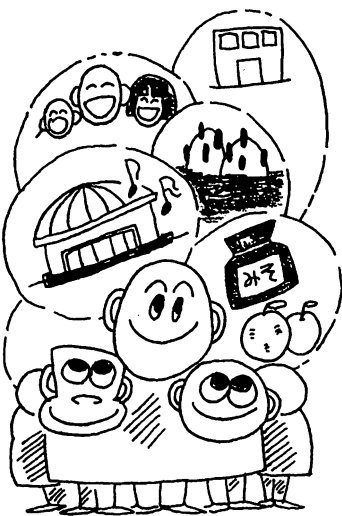
一年後、「村おこしテーマ別報告書」が作成提出され、実践活動へと展開され、その方法論は、アメリカパー方式と名づけられました。塾生は、ひとり又はふたりで、自分の得意な、あるいは好きなプロジェクトを選び、リーダーとして、全く新しいグループを組織し、活動を開始しました。

現在、十数個のプロジェクトが展開されていますが、その状況を簡単に、紹介したいと思います。まず、自然保護関係は、霧島連山を取り囲む県境を越え、二、三百人の新しい会員を組織するに至りました。また、村おこしでは、「街づくり会社」を設立し、国道改善をきっかけに、素晴らしい街並みを創りました。つぎに恒例となつた国際音楽祭は、七百席を持つクラシック専用ホールを創り出し、毎年夏には、世界各国からお客様を招きます。そして

特産品開発は、全く新しい産業を起こし、年間推定二億円の売り上げを創出し、女性だけの会社や、多くの産業経済活動の地域密着型のスタイルをつくりました。さらに「霧島少年少女のオペレッタ」では、子ども達が自作自演の作品を、多くの大人達に助けられながら演じ、子ども達の夢実現をも果たしています。他にも、多くのプロジェクトが活動しており、小さな町の中で数百名、いや一千名程の人達が、「生き生き」と、頑張っています。

「本当に、良かった」

誰も「町」のためなどと思いません。自分が、楽しいから、おもしろいから、お金儲かるから、幸せを感じるから、自分の存在感のある町づくりに取り組んでいるのです。今では、国や県さえも動かしつつあるこの現状は、もう私達二十人の塾生の手にはおえません。



「ねえ、どここの出身？」川之江に住む様になってよくされる質問です。

『出身』とはどういう意味だろう。「生れたところ」(広辞苑)では、質問の答えとしてたぶん意味をなしていない。それは、生まれた病院の所在地が、当時住んでいた所ではなくて、隣の県だからです。

いわゆる転勤族ではないけれど、引越の経験はあり、その土地土地での生活から、そのまちに対しての思いがあります。都会にも住んでいましたし、田舎の生活も知っています。風習も人情も当然それぞれです。

## 私の好きなまち

川之江市  
藤田昌子



「ねえ、どここの出身？」川之江に住む様になってよくされる質問です。それは、生まれた病院の所在地が、当時住んでいた所ではなくて、隣の県だからです。しかしそこは、人見知りを知らない性格と怖いもの知らずの元来の呑気さ。『住めば都』にするかしないかは、本人次第とばかり、色々な集りに入れてもらい、川之江での生活を楽しみ始めました。このまちだからこそ出来ることを次々と探し、それをするだけできなく探すことも楽しみにしてしまったのです。人口四万人足らずの川之江は結構な国際都市でもあります。原料を積んできた船の乗組員、

技術指導の為に企業へ来ている人、語学教師、日本の技術を学びに来ている研修生等々。短期滞在から長期、永住と期間もまちまち、言葉も、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、中国語、ロシア語等々で、この言葉かわからないものも聞こえてくる。

その人達も含めて、いいまちだと思つて欲しいし、好きになって欲しい。そんな風に思っている人が増えてきています。

人それぞれに、見方も感じ方も考え方も違う。その人なりにこのまちを楽しめるはず、好きになれるはず。決して無いものねだりをするのではなく、ただし、現状で我慢するのでもなく。

小さいまちなりの情報発信をしながら、川之江に大好き人間が増えてゆくことを願っています。「この出身?」「年齢は?」等々の『戸籍調べ』の代わりに、「このまちをどう思う?」「このまちは好き?」という会話がなされるまちになる様に、川之江を愛する人達

が頑張っているのです。そしてその過程を楽しみながら進んでいます。

少々の不安とともに始まったこのまちでの生活も十年が過ぎ、今までで一番長く住んだ所となりました。

これから先、いつまでも楽しめる大好きなまちにする為に張り切っているメンバーが増えて、ますます楽しみなまちになりそうです。



## 四季の風



東予市  
浜田成一

「昨年の水不足が笑い話と思うほど、今年はまんまと水を張ったたんぼでは、耕運機や田植え機の軽やかなエンジン音とかえるの鳴き声とが合唱し、農家の人たちは日曜日返上で農作業に精を出しています。それらの風景を横目で見ながら、ひたすら玉の汗をかきかき、もくもくと走っています。これが私の日常生活の一コマです。十数年前より健康目的（医者からやせなさいとイエローカードを受ける）で走り始めたのがやみつきになり、水泳、自転車も始め、あげくのはては恐いもの知らずでトライアスロンに挑戦。中島町の大会をはじめ、県内外の大会にも何回

か参加しました。成績は別にして参加することに生きがいを見つけ練習を積んでいました。

しかし、年齢と仕事と練習の関係は相成り立たず（両立してりっぱな成績をあげている人は多くいます）、今では四季それぞれの風やにおいを感じながら楽しく走ることに変わってきました。

石鎚山からの底冷えする寒風が吹く中を、「又何を好き好んでこの寒いのに」という冷たい視線をはね返しひたすら走る。イチゴハウスがうらやましい。なまけて走らない日など、子どもが「お父さん今日は走らんの」と声をかけて



恒例の元旦マラソン  
神社めぐり（左から二番目が浜田さん）

くる。背中をおされる様にゴソゴソと着替えて宵やみの中に飛び出していく。やがて風が変わって、

緑が多くなる。こうなると水を得た魚のように、日に日に走る距離が延びてくる。時には立ち止まり、つくしのありかを確認。休みの日に子どもたちと取りに来てみる風景を思い浮かべながら再び走る。満開の桜が足どりを軽くしてくれる。畑やたんぼにも人が出て、種蒔きや田おこしの段取りであわただしくなる。それも束の間、空を見上げて「今日も雨か、また雨か」とゆううつな梅雨が来る。それでも晴れ間を見計らって走る。そして太陽がとてつもなく身近に感じる季節を迎える。昨年などは川の魚と同じで、口をパクパクしながらあえいで走ったにがい経験。やがて稲穂に実がつまり頭をたれる絶好の季節。食事がおいしい。人からは「いつもも走っているのにやせんな」と言われる。走って消費するカロリーより補充の方が多いかと悩む。しかし、また走り食べる。祭りののぼりが立つ。どこ

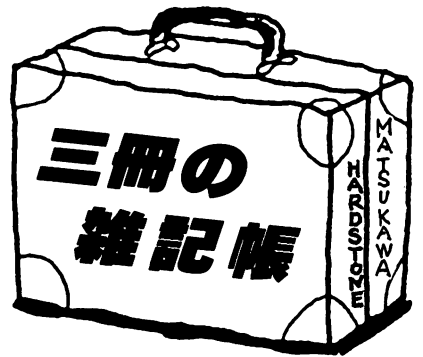


東予市駅伝大会に出場

までも澄み切った秋晴れのもと山を駆け回る。テレビで雪だよりを聞くようになると日が暮れるのが早くなる。反射たすきをかけて手袋、帽子と完全防備で外へ出る。元旦はランナー仲間と神社めぐりで家族のことや仕事のことをお願いし、最後に今年も無事走れますようにと祈願する。

これが私の数年来の生活パターンで、あと何年続くかわかりませんが、仕事とともにがんばって、いつも「自然がいっぱいの四季の風」を感じながら元気で走って過ごしたいと思います。

リレーで  
ちょっとク



## 野村町役場 松川伸二(前研究員)

れば、それで良い」という程度の認識でしかなかった。

しかし、その考えがいかにか甘いものかを教えられた愛媛県まちづくり総合センターでの一年間でした。

平成六年四月五日、初めてのセンター所内会。

所長からセンターの事業概要等の説明を受け、幅広い事業内容もさることながら、その行動範囲の広さに驚く。はたして、自分至今までの研究員と同様の仕事ができるだろうか、不安になる。

平成六年四月二十一日、事務局となった「えひめ地域づくり研究会議」の運営委員会。

何と元気のいい方たちの集まりだろう。行政マン、民間人それぞれが、それぞれの立場で自分の地域をしっかりと捉え、そしてネットワークを築き、それを活かしながら活動している。県内に、こういった組織があることすら知らなかった私である。

平成六年五月十九日、「舞たうん」七月号の編集会議。

二ヶ月後に発行する三十頁ほどのまちづくりに関する情報誌の企画会議である。その中で、「特集のテーマを設定するだけで、これほどまでして、ミーティングをする必要があるのだろうか」と、いささか疑問に思う。

しかし、一冊の小冊子を発行する度に何度となく繰り返される、この編集会議の過程の中で、私達研究員の知識が、徐々に深まっていくことに、その後気がつく。

平成六年六月二十二日、初めての県外出張。

あらゆる資料を収集し、研修目的を絞り、自ら研修先を決めての九州方面への四日間の訪問研修である。

この研修を企画する段階で訪問先での研修は、半ば終わったのではないかと思うほどの、知識が必要であったし、自分でも研修先の市町村等の実態はほぼ、把握できた気であった。

しかし、いざ訪問してみると、自

治体の概要は理解できていても、それは表舞台のことであって、本当の研修とは、それに関わった“人”の存在に気づくことである。その人に会い、その人の持っている考え方、エネルギーを直接肌で感じるからこそが、最も大切な研修であることに気がつく。

平成六年六月二十八日、情報収集のための三回目の県外出張。

この頃は、飛び回ることに慣れ、もつといろいろな“人”と出会い、会話を交わし、またいろいろな“もの”を見てみたいと少しずつ欲が出てきた時期である。

平成六年十月一日、私が編集長で取り組んだ「舞たうん」の発行自分としては、まあまああふりであると感じる。

平成六年八月二日、「ふるさと再発見・創造塾」(愛媛県主催)に同行しての、長野県方面への視察研修。

研修先の宿での、夜を徹しての塾生の熱心な「闘論」。まちづくりへの熱き情熱を感じ、自分自身の甘さを反省する。

昭和六十三年のふるさと創生事業を契機に盛んに言われ始めた「まちづくり」。何と曖昧な言葉だろう。

私自身この言葉の意味するところを、そんなに深く考えたことはなかった。行政マンである私にとって「まちづくり」とは、「与えられた仕事に一生懸命取り組み、無難にこなしていくこと。そして、生活の場である自分の住んでいる地域にしっかりと足を降ろしてい

平成六年十一月二十四日、東京での「地域づくり団体全国研修交流会」(地域づくり団体全国協議会主催)に参加。

まちづくりにおける、人と人のネットワークの大切さを痛感させられる。

平成七年一月二十八日、えひめ地域づくり研究会議九十四年次フォーラム。

事務局である私は、初めての経験であり、果たして参加していたいた方々の期待に添えるようなフォーラムになるだろうか、不安で一杯である。

でも、それぞれ価値観の違う方々が参加しているのである。それを判断するのは私ではなく、参加者それぞれの問題であり、自分が心配しても仕方がないと開き直る。そして、約百十名の参加を得て、終了することができ、充実感・満足感を味わうことができた。

平成七年二月二十四日、センター運営委員会。

この一年間の事業報告。その中で全研究員で取り組んだ「全国ま

ちづくり調査」の経過報告、また今後の展開を説明。

膨大な資料を整理する作業の中で、自分の知識がいかに微々たるものかを思い知らされた。

目から鱗が取れるような日々の連続であったこの一年間。何十回と繰り返された数々のミーティング、また参加させていただいた多種多様のシンポジウムやフォーラム、さらには県内外への訪問研修等、記憶力の悪い私が、その都度どんな小さなことでも書き留めた三冊の雑記帳がある。

その雑記帳を開きながら私自身の認識の甘かったこと、そして、センターに赴任してからの心境の変化を書きつづつてみました。

与えられた仕事をこなしていくだけでは、住んでいる地域に足を降ろしているだけでは前進はない。

自分の子供たちに何を残したらよいのか、コミュ(飲み)ニケーションを大切に、自分の地域を見つめ直し、今に留まることなく、更なる展開を模索し、行動に結びつけて行くことこそが、まちづ

くり”であり、その結果、元気のあるまちになるのだ。

経済的に潤っているだけが、活気のあるまちではない。いくら過疎であっても、地域資源を上手に活用し、決して「心の過疎」にならないことなく、その地域に住んでいることの意義をそれぞれが自覚し、いきいきと輝いて生活をしている。そして、そこに住んでいることを誇りに思っている。そんな素晴らしいまちが、全国にはたくさんある。こんなことを痛切に感じさせられた。

今振り返ってみるに、恥ずかしいことではありますが、センター研究員という立場をわきまえず、自分の目は絶えず自分の町、自分の職場に向いていたような気がします。

ただこの期間、まちづくりとは何か、これからのまちづくりのあり方とは等、まちづくりについて真剣に考えることができたことだけでも最高の幸せでした。もちろん、「まちづくりはこうだ」という答えは見つかりませんでした。

また答えなどあろうはずありません。

わずか一年間ではありましたが、様々なまちを訪ね、様々な人に出会い、貴重な経験をさせていただいた一年でした。

これを、私自身の一生の財産とし、この「財産」を「知識」とし、それを「知恵」に変え、そして「汗」に結びつけ「オンリーワン」のま

ちを目指して微力ながら頑張っていこうと思っています。

未熟な私に、価値ある財産を提供していただいた皆さんに心より感謝申し上げます。

最後に、雑記帳の中に朱書きで書き入れていた、ある方に教えていただいた言葉を添えて結びといたします。

「鮮やかに想像し、熱烈に望み、心から信じ、魂を込めた熱意をもって行動すれば、何事も遂には実現する」





# 「夢を形に」

国保一本松病院  
尾崎弘典（前研究員）

## ◆流れに乗る

一本松町教育委員会社会教育課からスタートした社会人としての第一歩に、まちづくりについての素晴らしい見識を持って、実践をしておられる愛媛大学教育学部教授の讃岐幸治先生と、双海町地域振興課長の若松進一さんに出会えたことが、「まちづくり」という遠大なテーマへの挑戦、そして、試験のはじまりで、何か新しいことをすればいいとか、まず、イベ

ントありきとか、そんな単純な気持ちではなく、「美しい、楽しいまちづくり」という一つの目的のもと、たくさん仲間と笑ったり、泣いたり、生きることの素晴らしさ、楽しさを学んだような気がしています。

福沢諭吉の心訓に、

「世の中で一番楽しく立派なことは、一生涯を貫く仕事を持つことだ」とあるように、これからみんなで「まちづくり」をやるうと、活気に満ちて夢の実現を願いに燃えていました。そういう活動をしている中で、当初から知っていましたし、憧れてもいた（財）愛媛県まちづくり総合センターへ派遣されるといふ、願ってもないチャンスが訪れたのです。快い緊張感とともに迎えた、「まちセン」初日が昨日のことのように思い出されます。

今まで、「ふるさと」というあ

る意味で限定された地域から、愛媛県という大きな舞台で、何が自分のできるのかを考えると不安にもなりましたが、今、思えば、何物にも変えがたい、まして、お金では買えない貴重な経験や、また、今までの自己を振り返ることができたと思っています。

## ◆出会って感動、

語って感謝

よく、旅は人を大人にするとか、人を育てるとか言いますが、県外の積極的なまちづくりを進めるリーダーたちのまちづくり論に触れる機会にも恵まれ、より広い視野、考え方ができるようになったと思います。

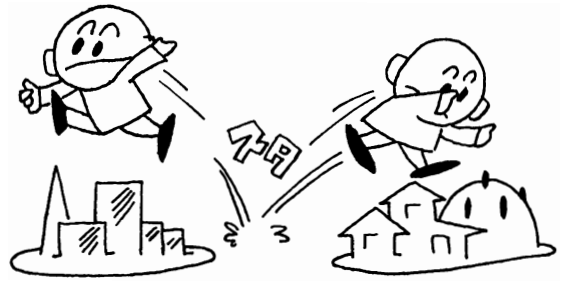
その中でも、田舎の素晴らしさと、自信を持つことの大切さを教えていただいた口ひげの似合う地域計画研究所の若井康彦さん。過疎に生きる人の声というか、人の心のぬくもりに気付かせてくれた長野県栄村の島田伯昭さん。田舎、過疎地で、厳しいながらも世界に



通用する普遍的な価値観を持って教えてくれた早稲田大学教育学部教授の宮口伺迪先生。やるしかないよと笑う長野県浪合村の近藤庸平さん。経済活動というか、まちにどうお金を循環させるかを語ってくれた鹿児島県牧園町の田島健夫さん。花、先人をキーワードに住民の心を一つにされた滋賀県高月町雨森地区の平井茂彦さん。

この他、紹介しきれないほどの素敵な方々との出会いを通じ、みなさん方の熱い心で将来を模索している姿を見て、焦りも感じましたが、地域での時間をかけたまちづくりという無限の空へ飛び立つ飛行機をどんなデザイン、形にするのかを根気よく対話することの大切さを学びました。

先進地といわれる地域は、この



過程の中で、外の力を活かしながら、また、受け入れながら、自らが苦しみの中からその答えを見つけています。

どんなことも、当然、課題や問題があつて、その克服のため、戦術や手法が生まれます。まちづくりにおいても、同じではないでしょうか。まちづくりの目的を模索する中で、この手法をどう進めていくのが、地域の知恵比べともいえるでしょう。そして、そのリーダーの資質が問われていると考えます。その資質は、既存の概念にとらわれることなく、グロー

バルに通ずる宮口先生の言葉を借りるなら、普遍的価値観で、物事を理解しようとすることといえると思います。

私の座右の銘の一つ、「まず動く」をモットーに、あまり難しく考えず、いろいろなと体験することにより、創造的で柔軟な考え方ができる頭脳を育てていきたいと考えています。

### ◆人づくりとは いうけれど

「まちセン」の存在の大きさ、大切さが、二年という日々の中で、ますます大きくなりました。

というのは、未熟ながらもこのような考え方ができたのは、私には間違いなく進歩であり、そのような職場環境であったといえるからです。

人の欠点はよく口にできるが、なかなか褒めることはできないということに耳にします。

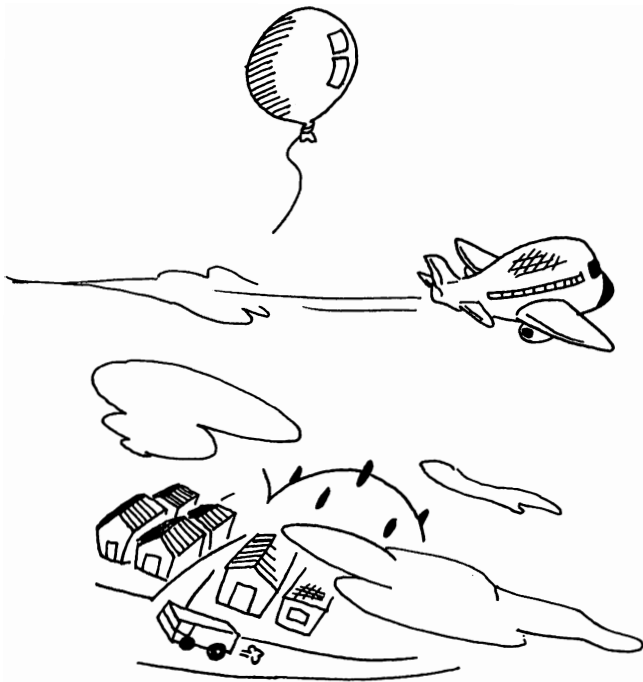
しかし、地域で、職場でお互い褒め合い、認め合う調和のとれた

環境をつくっていかないと、ヨーロッパに勝る美しい街並みなどできるはずもなく、心地よい地域などできるはずありません。

住民一人ひとりが、本音で語り、お互いの意識の向上を図る過程こそ人づくりでしょうし、そういう意識を持つ人々の手による運動こそ、「まちづくり」ではないでしょうか。

最後に、今一度、人が育つ環境はどうあるべきかを見詰め直すことの重要さを感じる事ができた「まちセン」に心から感謝するとともに、地道な一歩を踏み出したと思います。

また、乱文乱筆をお許しただくとともに、誌面をお借りして渡邊所長をはじめ、諸先輩、研究員の方々に心よりお礼申し上げます。

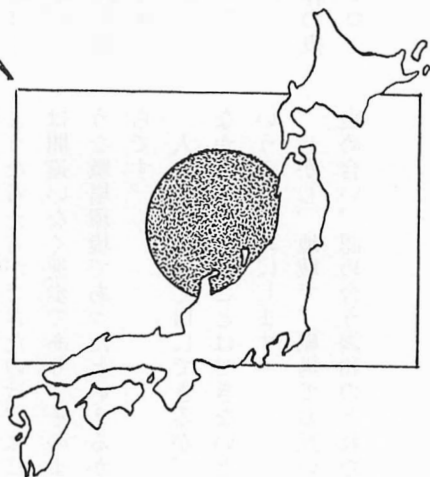
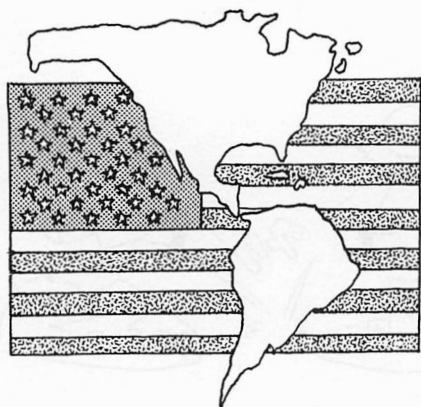


# 風おこしのちかい

## 「魚のいるところに網を打て」

えひめ地域づくり研究会議

代表運営委員 守谷和久



今、「ニューメディア」が脚光を浴びている。アメリカから「情報ハイウェイ構想」なんて言葉が輸入されたもんだから、日本中、それも新しもの好きの人々（それも多くの人々）が、ハチの巣をつついたようにそれはもう大さわぎ……。

ほんの二十年程前なんて、ビル・ゲイツやマイクロソフト社なんて聞いたこともない名前だった。それが今や、マイクロソフト社の最高経営責任者であり、億万長者である。そして、ビッグなIBMと渡り合うエクセレントカンパニーである。まさにアメリカンドリームそのものである。アメリカ

だけでなく、身近にジャパニーズドリームもたくさんある。ワープロソフトの「太郎」で有名なジャストシステムの浮川氏や西和彦氏なんかは、十五年前その影すら見えなかった。日本ソフトバンクの孫正義社長なんか三十七才で二千億円の資産家と話題になっている。

私はその時（十五年前）、日電のパーソナルコンピュータ、PC18000が出て間もない頃、友人があまりPC18000のことを良く言うので、ヘソをまげてそれを買わず、シャープのMZ2000というライバル機種を買った。もちろん妻にも、その頃四才と一才の息子にも相談せず買ってしまった。「しまった」と書いたのは、「シマッター」という気持ち

ちを込めてみたつもりである。

その頃何でもできるコンピュータ「魔法の箱」に二十四万円という、当時としては莫大な金を投資した。事業をスタートさせたばかりの私にとって大きな冒険であったし、「清水の舞台」でもあった。とどのつまり、そのMZ君はほとんど仕事らしい仕事（ワープロ機能さえなく）もせず、埃にまみれた。MZ2000がPC18000に負けてしまった……というところか？ただ、大きな夢とこれからこれらの時代が来るぞ……という確信だけは残った。ほんの少しだけ早かったようだ。レ、レ、私のテーマは、ニューメディアとその失敗談というのだったかな？

私たちがえひめ地域づくり研究会議の草創期はあたかも私のMZ2000のようであった。大きな『めあて』があった。そして、構成メンバー全ての人が『その気』になっていたように思う。

- ①めあてが明確にあること。
- ②人がその気になっていること。





以上二点を先ず挙げておきたい。

えひめ地域づくり研究会がスタートして来年で十年を迎える。今、もし可能性という箱に触れ、自分の生活が、否、人生そのものが劇的に変わるんじゃないか……とか思えなくなったり、地域にこだわっても、あまり楽しくもおもしろくもないとか考え始めたら、先に挙げた二点、『めあて』『その気』を再発見する旅に出なければならぬと考えている。実は、私もつい先日遅ればせながら、その旅に出たところである。コンピュータ関係の雑誌の巻頭言に次のような言葉があった。「これからのコンピュータ業界やマルチメディアは社会に多様な役割を果たしていく。考えただけで、そのおもしろさや巨大な市場の可能性を考えると、興奮で身が震えるほどである」

私には残念ながら、今、地域づくりに関し、「考えただけでその楽しさ、おもしろさ、素晴らしさに身が震えるほどである」と、言えぬ……。

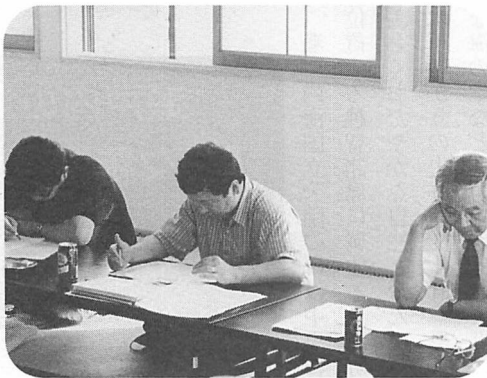
えひめ地域づくり研究会

運営委員会での一コマ



私は来年数えて四十八才になる。「四十八才の抵抗」をすべく、いま旅の途上にある。「身や心が打ち震えるようだ」と、三十代とは違う言葉で同じ意味のことを言ってみよう。そう願っている。四十八才の抵抗もせず、五年間三十九才の、地域にこだわり続けた文化誌を残して逝ってしまった彼を想うとき、少しばかり覚悟ができた。えひめ地域づくり研究会、この十周年をふり返る文章のはず……

……が道草（その一）になったことを皆様にお許しをたまわりたい。研究会議の活動をふり返ることもある意味で非常に大切なことではあるが、それぞれの地域の「地理・歴史」の文脈をはずさず前へ行動することに「タメライ」があつてはならない。今、私は道草をくいながら、そうつぶやいて歩いている。



真剣にまちづくりについて考える

運営委員の皆さん

## 風おこしのちかい

えひめを愛しそれぞれのまち  
むらに生きる我ら同志は、ま  
ち、むらのために新しい未来  
を自らの力で拓くべく、心に  
希望の灯をかけた、学びあい  
結びあいながら、よりよい明  
日に向かって、地域づくりの  
風おこしとなることをちかう。

一九八七年十一月十四日

(内子座にて)

みんなで楽しく習おう楽習のやかた  
「生涯学習の館」  
オープン！  
西条市

西条市生涯学習の館が、今年四月十五日にオープンしました。当館は、音楽、美術、木工芸等の芸術文化活動の場と各種学習情報を提供する施設です。学習の館は楽習に通じ、楽しく習い体験する場所でもあります。工房、第一・第二音楽練習室、アトリエを使用する場合は有料となりますが、資料室、情報室、展示コーナーの使用は無料です。木工機械や楽器類、絵画用具も備えています。資料室では芸術関係の図書、ビデオテープ、ビデオディスク、CD、カセットテープ等で学習もできます。音楽練習室は楽器の練習やコーラス、コンサート、音楽鑑賞に利用



できます。おひとりでもグループでもご利用ください。

※利用時間 午前九時～午後十時

※休館日 毎週月曜日、祝日の翌日、年末年始

※問い合わせ先

西条市生涯学習の館

☎ 0897 (53) 8686

FAX 0897 (53) 8687

瀬戸内の湯  
「多々羅温泉」  
オープン！  
上浦町

瀬戸内海国立公園のほぼ中央に位置する越智諸島に属する上浦町。美しくおだやかな自然と澄んだ海水軍ゆかりの史跡、文化財、豊富な海の幸など魅力いっぱい町の多々羅温泉施設が、平成七年五月一日にオープンしました。

施設はヒノキをふんだんに使った和風建築。円柱形の浴室は最大直径一丈、高さ約七尺のヒノキを支柱としており、ジェット泡風呂、サウナ、水風呂などがあります。またトレーニング室や畳敷きの談話室もあり、入浴後もゆっくりとくつろげるようになっていきます。泉質はラドンを中心とした良質な塩化物冷鉱泉で深さ一千メートル

湧き出る温泉は

神経痛、筋肉痛、

消化器病、疲労

回復、健康増進

など多くの効能があります。

おだやかな自然の中でやすらぎ

といこいのひとときを過ごせる多々羅温泉へのご来館を心よりお待ちしております。

※営業時間

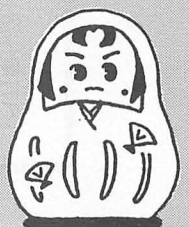
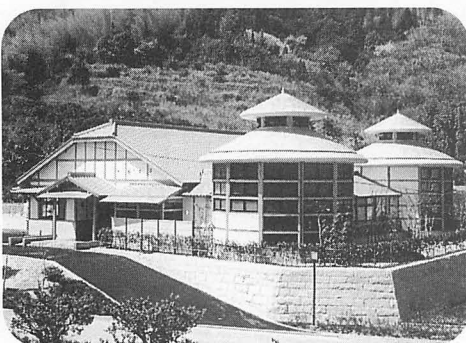
午前十時～午後八時  
(受付は、午後七時三十分まで)

※休館日 毎週月曜日

※問い合わせ先

多々羅温泉

☎ 0897 (87) 4100





- 中山町の顔である「栗」をテーマとした栗の里公園内の緑の空間で都市住民との交流の場として、
- 「人の体温」が感じられる企画運営
- 多くの年齢層に向けての「文化発信」
- 定期的なイベント展開による「生きている広場」
- 伝説が誕生する広場
- 日本にアピールする音楽広場を目指し、野外音楽広場が完成しました。

## 手作り文化の発信地に 「野外音楽広場」 誕生！

中山町



ステージは、半径十二坪の半円形、床の中央部には、町のシンボルマークをデザイン、後方は池になっています。

「中山らしい、手作り文化」の発信地になり、一人でも多くの中山ファンづくりに努めたいと考えています。

※問い合わせ先

中山町役場 産業振興課

☎ 0899 (67) 1111

## 南レク 「津島プレーランド」 開園！

津島プレーランドは、「行動する」「楽しむ」「憩う」をテーマに、今年の四月、南レク六か所目の公園として、南楽園の隣に開園しました。

一九・四畝の園内には、F1さながらのレース感覚が手軽に楽しめる」と好評の南レクサーキット（一周七百メートル）や夜間照明付きの人工芝テニスコート（十二面）、島全体をネットで覆いフラミンゴなどの鳥を放し飼いにした日本最大規模のバードアイランドのほか、ペタルボートや高射噴水のあるトッポ池など、若者にも喜ばれ利用される施設を整備しております。近くには、南楽園やファミリ-



パーク、御荘・城辺地区のレジヤープール、展望タワー、ジャンボスライダーなどもありますので、あわせてご利用ください。

※問い合わせ先

南レク都市開発(株)

津島プレーランド

☎ 0895 (32) 6878

愛媛県都市整備課

☎ 0899 (4) 9712

いにしえ人のきずなを今  
「武左衛門一揆記念館・  
大野作太郎地質館」  
オープン！  
日吉村

日吉村に武左衛門一揆記念館・大野作太郎地質館がオープンしました。一揆記念館・地質館とも、「日吉村文化の丘 明星ヶ丘整備事業」の中核施設として新設されました。

武左衛門一揆記念館は、寛政五年（一七九三年）吉田藩で蜂起された一揆で、武左衛門翁をはじめ農民の固いきずなと、吉田藩家老安藤継明翁の奉仕の心があって、農民の全面勝利に終わったという全国的に有名な一揆の資料を展示しております。

大野作太郎地質館は、大野作太郎翁が遺した「自然の声を聞け」の言葉から、人と自然のきずなの

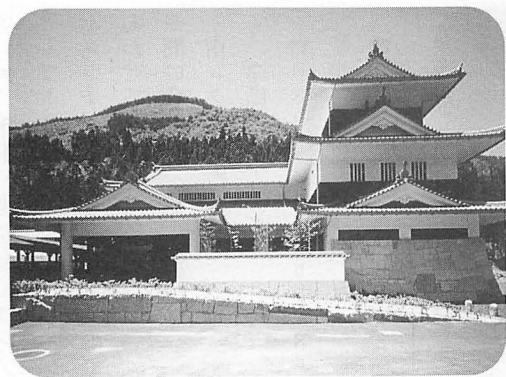


在り方を学ぶために、翁が採集した化石や諸資料を展示しています。是非、一度お立ち寄り下さい。  
※休館日 毎週火曜日、年末年始  
※観覧料 大人二〇〇円、小人無料  
※問い合わせ先  
日吉村役場教育委員会  
☎0895(44)2129

やすらぎとふれあい交流の場  
「山出憩いの里温泉」  
オープン！  
城辺町

やすらぎとふれあい交流の拠点施設として、「山出憩いの里温泉」が平成七年四月にオープンしました。

やすらぎ交流館は、鉄筋コンクリート造二階建てで、一階には、特産品販売・絵の展示ができるふれあいホールや居心地の良い居間と岩風呂からなる家族風呂（二室）、二階には、カラオケなどが楽しめる百人まで収容可能な交流室や研修室が造られており、町のシンボルとして町民に親しまれるよう外観はお城風になっています。隣接する体験創造館は、木造平屋建てで、創作室や湯治などができる体験学習室（宿泊有）、旧施



設には浴室（岩風呂・二十人用）を増築し、子どもからお年寄りまでがゆったりとくつろげる施設となっています。是非、一度お越し下さい。  
※営業時間 午前十時～午後九時  
※休館日 毎月第一・三月曜日、十二月三十一日、一月一日  
※問い合わせ先  
山出憩いの里温泉  
☎0895(72)6263



## 愛媛県から“組織改正”のお知らせ

愛媛県では、「生活文化県政 新・プラン21」の諸施策をはじめ、各般にわたる重要施策を着実に推進するため、県民サイドに立って、一般の県民の方々にわかりやすく、職員が仕事のしやすい機構づくりを柱として、平成7年4月1日付けの組織改正を行いました。

改正内容	担 当 事 務 等
「企画総室」の設置	地方分権の時代に対応し、地方の独自性、自主性を発揮した政策の企画・展開を図るため、企画調整部を廃止し、知事直属の組織として「企画総室」を設置しました。
「企画課」の設置 (政策調整課の改称)	「生活文化県政新プラン21」に基づき、様々な施策を企画していきます。
「行政改革・地方分権推進室」の設置	簡素で効率的な県政推進方策を検討し、行政改革を進めるとともに、国・県・市町村の役割分担等について検討し、地方分権の受け皿づくりを進めます。
「生活文化部」の設置	第3期生活文化県政の主要施策である文化の振興、生涯学習・国際交流の推進、男女共同参画型社会づくり、開かれた県政の推進等を強力に展開するため、生活文化総室を充実強化し、「生活文化部」を設置しました。
「国際交流課」の設置 (企画調整部から移管)	松山－ソウル間の定期航空路の開設等を契機とした国際化の進展に対し、文化、学術、スポーツ等国際交流の多彩な展開を図ります。
「交通消防課」の設置 (企画調整部から移管)	県民の生活に密着した交通安全、消防、防災対策等を充実し、安全な日常生活を確保します。
「県民情報課」の設置	県民参加の公正で開かれた県政を一層推進し、県政に対する理解と信頼を深めるため、情報公開、行政手続、県民からの相談に関する事務を行います。
県民福祉部「児童福祉課」の設置 (婦人児童福祉課の改称)	婦人児童福祉課で所管している婦人保護に関する業務を社会福祉課に移管し、婦人児童福祉課を「児童福祉課」に改称しました。
保健環境部「衛生指導課」の設置 (生活衛生課の改称)	生活衛生課の生活環境関係事業を環境保全課に移管し、生活衛生課を「衛生指導課」に改称しました。
保健環境部「健康増進課」の設置 (保健指導課の改称)	生涯を通じたより高度な健康づくり対策を積極的に推進するため、保健指導課を「健康増進課」に改称しました。
「環境局」の設置	生活様式の変化に伴い、複雑、多様化する環境問題に対応し、安全で快適な生活環境の整備及び自然環境の保護に積極的に取り組むため、環境事務の所管課を一元化して「環境局」を設置しました。
「経済労働部」の設置 (商工労働部の改称)	従来の商工業の振興に加えて、貿易、流通など県域を超えた幅広い経済活動分野の施策を充実、推進するため、商工労働部を「経済労働部」に改称しました。
農林水産部森林林業課の 「林業振興課」及び「森林整備課」への分割	流域林業活性化構想や中山間活性化対策の推進、異常洪水に備えた水源林の整備等の重要課題に対応し、森林林業課を経済的な面から林業振興を推進する「林業振興課」と公益的な面から森林保全を推進する「森林整備課」に分割しました。
土木部「道路局」の設置	土木部道路整備局を「道路局」に改称し、西瀬戸自動車道及び高速道路の建設促進のため、「高速道路課長」を配置しました。
土木部「都市局」の設置	総合的な都市づくりを推進し快適な都市環境づくりを進めるため、都市整備部門と建築住宅部門を一元化し、土木部に「都市局」を設置しました。
土木部「水資源局」の設置	ダム建設事業の促進とともに、水資源の総合的な利用の検討など渇水に強い県土づくりを進めるため、土木部水資源開発局を充実強化して「水資源局」に改称し、「計画課長」及び「調査課長」を配置しました。

# お知らせ (財団法人 愛媛県市町村振興協会)

## ◆ 『サマージャンボ宝くじ』

(別称 市町村振興宝くじ) の発売

1等 6,000万円 200本

1等・前後賞合せて 1億3,000万円

ラッキーレジャー賞 200万円 10,000本

(発売総額1,500億円・50ユニットの場合)

## ◆ 7月28日(金)から予約受付

## ◆ 『この宝くじの収益金は 市町村の明るく住み良い街づくりに使われます。』



## 人事消息

「舞たうん」編集係の一員だった中路由加理さんが四月十四日付で、また川原千明さんが四月三十日付でセンターを退職しました。



中路由加理



川原 千明



篠浦 美江

四月十六日からセンターの一員となりました篠浦美江です。よろしくお願致します。

うっとうしい梅雨が明けると待ちに待った夏本番ノ今年はどこへ行くのかな？海、山、遊園地、いっぱいあって迷ってしまうなあー！

さて、今号から編集係の一員となりました。不慣れですが、一生懸命頑張っていきたいと思えます。皆さん近くに来られたらぜひ寄って下さいね。

\*\*\*\*\*

内容についてのご意見や活動内容についての記事など、お気軽にお寄せください。

「舞たうん」編集係

篠浦まで

〒790 松山市三番町八丁目

一三四番地

愛媛県生活保健ビル三階

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

TEL 0899(32)7750

FAX 0899(32)7760

発行ノ平成七年七月十日

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

(財)愛媛県市町村振興協会